

## Core 2 Core 報告書

ボン短期留学プログラム(2016年9月4日～9月21日)

早稲田大学大学院 先進理工学研究科 電気・情報生命専攻  
生理・薬理学研究室 (柴田研究室) 修士一年  
安田 晋之介

- 訪問先：ドイツ、ボン大学
- 滞在研究機関名：Institute of innate immunity, University of Bonn
- 滞在研究室名：Prof. Latz Laboratory
- ホスト氏名：Prof. Eicke Latz, Mr. Bernardo Franklin

### ●研究・交流概要

Latz 研究室は主に自然免疫系の研究を行っている。私が普段研究する体内時計との関連も多いため、本プログラムでは Latz 研究室を訪問し二週間の研究生生活を行った。Latz 研究室で教わったことは大きく分けて二つある。一つはヒト由来の細胞を用いた培養方法で、接着細胞と浮遊細胞の継代手法の違い等を学ぶことができた。もう一つは自然免疫系の中でも炎症性の免疫機構において重要なインフラマソームの活性に関わるタンパク質の検出である。ここではマウスの結腸のサンプルを用いてウエスタンブロッティングによる実験を行った。私はリアルタイム RT-PCR 等で遺伝子発現を確認することが多いためウエスタンブロッティングによるタンパク質の検出はとても新鮮であり勉強になった。このように本プログラムでは、自分自身の研究の幅を広げるために新たな実験手法の習得や知識の習得が主な研究活動となった。英語での研究室生活が初めてで苦勞した部分も多かったが、聞き取れなかった部分は何度も聞き直し積極的に英語でのコミュニケーションを試みた。また、研究室のメンバーが簡単な単語に言い変えてくれたり、ゆっくり話したりしてくれたため、英語での研究生生活にも悲観的にならず徐々に慣れていった。実験以外にもゼミに2回、セミナーに1回参加させて頂き、学生の積極的な姿勢や議論の様子を見ることができた。最終日のシンポジウムでは研究成果を発表する機会を設けて頂き、初めて英語での発表を行った。そこでは英語での質疑応答の難しさを実感すると共

に英語の勉強をより行う必要があると改めて感じる事ができた。

また、この二週間、ドイツの研究室のメンバーと一緒に居て感心持ったのは集中のスイッチのオンとオフがしっかりしていることだ。朝の9時に研究室に来て16時頃帰るメンバーも多く、短時間で効率良く時間を使っている印象を受けた。

### ● 総括

本プログラムを通して研究手法だけではなく研究に対する自主性、積極性なども肌で感じる事ができた。この経験は自分自身の研究に役立て、研究者としてこれからも切磋琢磨していこうと考えている。



18<sup>th</sup> German-Japanese Joint Symposium between the University of Bonn  
and Waseda University 集合写真